

## [実践報告]

## 体験型授業の課題と展望(2) —「地域社会と子ども」の実践報告—

### The Problem and the Vision of Studying Through Actual Experience (2)

—A Report on “Community and Children” Teaching Practice—

山 森 泉\*

#### 要旨

2011年度に新設された体験型授業「地域社会と子ども」は、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士資格の取得を目指す幼児児童教育学科の学生にとって満足度が高い授業であった。2012年度は、前年度の学生のアンケート結果も参考に、一部シラバスを改良して実施した。本稿では、主として2011年度との比較<sup>1</sup>を含めた結果報告及び考察を行い、今後の授業のあり方について考える。

キーワード：体験型授業／学士課程教育／子どもとのかかわり／見る力の育成

#### 1. はじめに

文部科学省が定める教育情報公開に関する主な規定の中で、大学は人材養成の目的を公表しなければならないとされた(大学設置基準第2条の2)。<sup>2</sup>

本学人間総合学部においては、まず学則において「愛と奉仕の精神をもって、地域社会と人類社会に貢献する国際的感覚の豊かな人材の育成を目的とする」<sup>3</sup>と規定され、学部段階では「第1条の目的を達成するため(中略)、すべての人が豊かで質の高い生活を可能とする社会の実現に貢献できる総合的かつ専門的な人材の育成を目的とする」<sup>4</sup>と規定されている。さらに、学科レベルでは、「幼児児童教育学科は、人生の初期段階の乳幼児期から児童期にわたる発達に関する包括的視野と学問的実践力を培うことを教育研究の目的とし、もって科学的探究心と知的創造力を備えた人間形成の補助者・先導者としての保育者・教育者を育成する」<sup>5</sup>ことが明記されている。また、2010(平成22)年の大学設置基準の改正では、大学教育において「学生が卒業後自らの資質を向

上させ、社会的職業的自立を図るために必要な能力を培うことができるよう」大学内部組織での有機的連携と適切な体制に整備することが求められた。

これらの点に関して、幼児児童教育学科は保育者・教育者という専門的職業人養成が主であることを明確に打ち出しており、志願する学生の多くは、大学卒業後の職業として掲げられている具体的職種の資格取得を目標に入学を志していると考えられる。その要望に応えるために、また適性の確認も含めて、「地域社会と子ども」の授業を1年次前期に設定している。この科目は専門的学びを行うための入門科目として位置付けており、学科必修科目である。0歳から小学校段階までの子どもについての概要を学ぶ講義と、見学・参加の体験活動を行うことで、子ども理解のための基礎的学びを導入している。早い段階で将来の職業像及びそれに求められる知識・技能・適性を具体的に把握する学生の一方で、入学時の甘い考えでは通用しないことを認識し、適性がない場合にはそれを自覚して進路変更を考える学生もいる。前稿<sup>6</sup>でも述べたように、他分野に比べて保育系・教育系への進学意欲は高く、幼児児童教育学科でも目的意識がはっきりしている学生が多い。しかしな

がら、一方で不本意入学の学生がいることも事実である。異なる分野を第一志望としていた学生の場合、適性や職業観を持たないまま入学してくることになる。昨年度の調査では、約10%の学生が幼児・児童とかかわる機会を持たずに本学科に入学してきている。そして、2年次の時点でやはり10%程度の学生が適性・意欲・関心という点から保育者・教育者以外の就職を希望している。<sup>7</sup>

本学科では、2011年度入学生からコース制を導入している。小学校教諭・幼稚園教諭を目指す「児童教育コース」、保育士・幼稚園教諭を目指す「幼児保育コース」が、専門職での就職に対応している。資格取得を希望しない場合には、幅広く人間について学ぶ、あるいは他学科の科目を受講する「人間理解コース」の所属となる。このコース選択に際しても「地域社会と子ども」の授業を通して、漠然としていた職業観や資格取得に必要な適性確認を行うことができることも、科目設定のねらいとしている。

本稿では、2011年度と2012年度の授業の変更点についてまず説明し、アンケート及び最終レポートによって把握できた学生の関心や学びについて、考察を試みることにする。

#### 2. シラバスの見直しと授業の概要

1) 新設科目「総合教養A」と「地域社会と子ども」  
2012年度入学生からはカリキュラムの全学改組に伴い、従来の基礎科目区分の科目構成が変更された。そのため卒業要件の上では、「基礎科目から20単位以上修得」が、「全学共通科目群から20単位以上」となった。全学共通科目に含まれる科目で新設されたのは、「総合教養A～D」、「キャリア科目」、「基礎力強化科目」である。<sup>8</sup>「総合教養」は前期から開講され、必ず1科目2単位以上修得しなければならず、学生は短大部も含めた4学科から提供された科目から自学科開講科目を除いて1科目以上を履修する。幼児児童教育学科では前期に自学科の開講科目以外から1科目を履修するが、後期は幼児児童教育学科の提供する科目を全員が履修することになっている。幼児児童教育学科が提供する総合教養Aは、「『子ども』」をキーワードに様々な角度から話題を提供する。少子化が進行する現代にあって、子どもの魅

力、子育ての楽しさ、子どもから学ぶことなど、多くの事例を通して理解を深める。私たちが生きている社会において、人が人として尊重されるために必要なことは何か。現在の問題点を取り上げ、受講者が自らの問題として捉え対処していくことができる方向性を示す。

オムニバス方式の本講義では、講義を聴くだけの受け身の授業ではなく、出席者との質疑応答のほか、時には体を動かしながらの授業も行う。」としている。「地域社会と子ども」とは異なった観点から、子どもを取り巻く環境や子どもに関わってきた教員の目を通した子どもの姿を学ぶ。またこの授業を通して、「地域社会と子ども」とは別の視点から子どもを対象とした職業について考える機会を持つことになり、2年次コース選択の際に参考とする科目が追加された点が2011年度入学生と異なる。<sup>9</sup>

#### 2) 「地域社会と子ども」のシラバス変更

授業のねらいは、2012年度も2011年度と同様で、次の4点を学生に提示した。①学科必修科目・資格取得に必要な学びを行うための入門科目である ②学生は保育者・教育者として子どもにかかわる実践力の基礎を身につけるために、様々な環境において子どもとのふれあいを体験する ③各体験の前には子どもの発達とそれにかかわる今日的テーマでの概説が行われる ④講義と体験をとおして、専門科目の学びの方向性をつかむ、である。2012年度の授業担当者は5名、うち3名は2011年度に引き続いてこの科目を担当し、新たに2名が(いずれも2012年度より学科専任として)加わった。2011年度同様、同じ教員が基礎ゼミも担当することで、大学での学び(ディスカッション、レポート作成等の能力)を有機的に身につけさせる意図もある。(実際に、学外活動やディスカッションがスムーズに進行したという成果がある。)

2012年度の大きな変更は、

①授業初年度からねらいとしている「事前講義⇒現場体験⇒レポート作成・グループでの話し合い」という流れを、より明確にシラバスに組み込んだ点にある。<sup>10</sup> 2012年度は授業時に参観を行うことができない児童養護施設

\* YAMAMORI, Izumi  
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科  
日本語表現法

と学童保育(放課後児童クラブ)については、講義対象から除外して、「キャリア概論Ⅰ・Ⅱ」で扱うようにした。

②参観後のグループディスカッションを2回設定した。1回目は同じ施設見学をしたゼミメンバーで参観時の疑問を出し合いながらの振り返りとし、2回目は合同授業の中で参観先が異なるメンバーでのグループ構成を行い、施設ごとの特色を出し合ったり、学びや気づきを共有したりした。

③2012年度は、『子どもにかかわる仕事』<sup>11</sup>を指定テキストとして配布し、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭以外にも子どもにかかわるしごとがあることを、現職者による文章を通して学べるようにした。

④子どもとのふれあい第1回目となる「Enjoy! ミッション」では、2年生と共同で担当する

等、学生の役割を指定した。

⑤1年次夏休みに行う幼稚園でのプレ実習、後期から始まる幼稚園実習指導Ⅰ、幼稚園教育実習Ⅰに学外体験を生かすため、参観レポート書式を一部変更し、実習日誌記録につながるものとした。<sup>12</sup>

⑥事前学習として、参観先小学校・幼稚園・保育所について事前レポートを課し、参観時のねらいを具体的に持つように指導した。

⑦依頼した学外施設は2011年度とほぼ同様であるが、保育所のみ2か所の参観先を変更した。また、レポート記載内容が十分でない場合は、ゼミ担当教員の判断と指導により書き直しを求めた。

授業進行の違いが分かるように、2011年度、2012年度のシラバスを表1、表2に示す。

表1 授業シラバス(2012)

授業計画	時限	内 容	
1	4月12日	木1限	オリエンテーション：科目を学ぶ意義、到達目標、学内外の体験活動の諸注意・マナー
2	4月19日	木1限	プレ実習について：資格取得のために必要な実習前体験学習と参加時の心得 ボランティア体験の勧め
3	4月26日	木1限	Enjoy! ミッション実施について：行事における幼稚園児・小学生とのかかわり
4	5月10日	木1限	児童期の子ども：小学生の発達・特徴、学習支援員について
5	5月19日	土	学外体験活動①：Enjoy! ミッション参加
6	5月24日	木1・2限	学外体験活動②：小学校参観
7	5月31日	木1限	グループディスカッション：小学校参観振り返り
8	6月7日	木1限	幼児期の子ども：幼稚園の子どもを中心に学ぶ
9	6月14日	木1・2限	学外体験活動③：幼稚園参観
10	6月21日	木1限	グループディスカッション：幼稚園参観振り返り
11	6月28日	木1限	乳児期の子ども：保育所・子育て支援について
12	7月5日	木1・2限	学外体験活動④：保育所
13	7月12日	木1限	グループディスカッション：保育所振り返り
14	7月19日	木1限	4回の学外体験からの学び・グループディスカッション・まとめレポート作成
15	7月26日	木1限	全体レポート発表
予備日7/25	水		(補講日)

表2 授業シラバス(2011)

回	日	時限	2011年度 内 容
1	4月7日	木1限	オリエンテーション：科目を学ぶ意義、到達目標、学内外の体験活動の諸注意・マナー
2	4月14日	木1限	プレ実習について：資格取得のために必要な実習前体験学習と参加時の心得
3	4月21日	木1限	ボランティア体験の勧め
4	4月28日	木1限	Enjoy! ミッション実施について：行事における幼稚園児・小学生とのかかわり
5	5月12日	木1限	幼児期の子ども：幼稚園の子どもを中心に学ぶ
6	5月26日	木1限	児童期の子どもⅠ：小学生の発達・特徴、学習支援員について
7	5月21日	(土)	学外体験活動①：Enjoy! ミッション参加
8	5月26日	木1・2限	学外体験活動②：小学校参観
9	6月9日	木1・2限	学外体験活動③：幼稚園参観
10	6月16日	木1限	中間まとめ 補足説明・参観記録などの指導
11	6月23日	木2限	乳児期の子ども：保育所・子育て支援について
12	6月30日	木1・2限	学外体験活動④：保育所
13	7月7日	木1限	児童期の子どもⅡ：児童養護施設で暮らす子ども、学童保育を利用する子ども
14	7月14日	木1限	グループディスカッション・まとめ
15	7月21日	木1限	レポート発表
	7月28日		予備日

### 3) 学生の現状

入学時点での調査によるコース希望動向を表3に示す。2011年度との単純比較では、2012年度は全員が資格取得を目指して入学していることを示しており、小学校教諭・幼稚園教諭の資格取得を目指すコース希望者が増えている。各種免許資格の取得を「強く希望する者」の内訳は、小学校教諭が33.3% (2011年度23.0%、以下同じ)、幼稚園教諭が84.0% (74.0%)、保育士資格が54.7% (68.0%) となっている(複数回答可)。

表3 コース希望調査

コース名	児童教育	幼児保育	人間理解	合計(%)
2012年度	37.3	62.7	0.0	100
2011年度	28.0	71.0	1.0	100

なお、2011年度は入学時までには体験したボランティア経験の内容や体験先施設についての調査を行ったが、本年度は実施しなかった。

### 4) 学外体験

学外体験4回の基本の枠組みは2012年度も同様であり、表1に示したシラバス通りに実施できた。主な体験内容は参観先によって異なるが、本稿では詳細は省く(注1参照)。昨年度は受け入れ先の日程の関係上、学外施設参観は小学校、幼稚園、保育所の順に行われ、発達段階をさかのぼる形での参観・学びとなった。小学校のように教室内で座席に座っている児童と教壇で授業を進める教師と対比的に見ていくことで観察の視点を定めやすく、結果として、学生にとっては学びやすかった。したがって2年目である2012年度も小学校、幼稚園、保育所の順で参観を行うことにした。

#### (1) 学院行事「Enjoy! ミッション」への参加

学外体験の1回目は、昨年同様、本学院の行事「Enjoy! ミッション」への参加である。学院本部の主催により部局間の連携を目的として、大学のキャンパスを会場に例年5月に行われている。<sup>13</sup>

この行事参加を「地域社会と子ども」の授業に組み込むことで、幼児児童教育学科の1年生は全員が何らかの形でかかわる。2012年度は幼児児



童教育学科の2年生が中心となった遊びの企画を出し、1年生はその企画への参加のほか、いくつかのテーマ(役割)が与えられ、チームを組んで準備したり、当日の係の責任を果たしたりした。具体的には、①小学生担当チーム ②竹遊びチーム ③昔遊びチーム ④絵本館Ⅱ号<sup>14</sup> ⑤飛行船と、5つのチームに分かれた。なお、④⑤はReDECものづくり講座<sup>15</sup>の一環として行われ、予め登録している学生が担当した。

この行事では、いずれの役割であっても幼稚園児や小学生とかかわりを持つことになるだけでなく、その保護者、また中学生・高校生とかかわるケースもある。当日は、「今日の私の役割」と「子ども目線であそびを体感」の二つが予め課題として提示されており、学生たちはそれぞれに取り組んだ。

①は小学校1、2年生の三小牛キャンパスでの遊び案内係で、小学生6人ほどで構成された6つのチームを任される。当日は小学校の玄関まで迎えに行くことから始まり、案内係であることが分かる名札製作も事前準備として含まれている。

②竹遊びチームの役割は、竹ブランコや滑り台などの準備、当日の係については前半、後半の時間帯で担当した。当日は8:50に集合して点呼を行い、グループに分かれて準備を開始した。手があいている人は、幼稚園・小学校の合同礼拝に参加して子どもたちの姿を観察する機会とした。

③昔遊びチームは外部講師の指導のもとに準備を進めた。④の担当講師は当日不在のため、事前に設営・準備等の打ち合わせをしておき、4年生がアドバイザーとして加わった。⑤は、担当教員が指導する3~4年のゼミ学生が加わって準備段階から進めた。

(2) 小学校参観

今年の参観日に運動会を実施していたのは1校のみ、他の4校は運動会予行1校と通常授業3校であった。昨年度は、参観先5校のうち日常の授業実施校が2校、学校行事としての運動会が3校であった。通常授業の参観と運動会等の行事の参観では学生の見る視点・参観後の印象は随分違う。昨年度運動会を参観した学生たちの多くは、教師と子どもの直接的なかかわりを見ることなく、

今回は授業参観をしたいという要望を持っていた。<sup>16</sup>確かに通常授業では、教室内で教師と子どもが関わる実際の場面を想像しやすく、そこから学びとれるものが多くあるように思うからであろう。しかし、今回運動会を参観した学生たちは、通常授業の参観希望を述べなかった。それは、事前に参観小学校について事前レポートを作成することで、何となくその小学校の雰囲気が分かったように感じたのか、あるいは事前に運動会を実施していることを伝えてあり、どういう視点で参観するかのをねらいを考えさせたことによるのかもしれない。運動会等の行事の中でも、どこをどのように見るとかという視点は多くある。運動会当日は、さほど直接教師が指導しなくても子どもたちが自主的に動いている姿を見る。しかし、見たことの背後を推察することをヒントとして学生に与えると、運動会本番までの教師の指導がどのようにされたのかを想像したり(具体的には難しいが)、当日中心となる教師が全体演技の際にどこにいてどのような指示を出していたか、クラス対抗でタイムを競う種目の審判を務めた教師が学年に応じた対応をしていたことなど、教師の指導性について観察することができる。

(3) 幼稚園参観

2012年度の幼稚園参観も、昨年度と同じ5園のキリスト教主義幼稚園を訪問した。滞在時間は約2時間、子どもとの会話や交流をせずに観察に徹した1園を除き、子どもとかかわる時間が持たれた。

2011年度入学生のカリキュラムから小学校教諭・幼稚園教諭・保育士の資格取得希望者は、まず1年次1月に必ず1月にキリスト教主義幼稚園で5日間の幼稚園教育実習Ⅰを履修する。そのため、8月にキリスト教主義以外の幼稚園で、9月には実習予定のキリスト教主義幼稚園でプレ実習<sup>17</sup>を行うことにしている。正課としての実習指導の授業は後期からの履修となるため、参観記録の書式を改良し、参観内容を時系列に記すこと、環境構成を図式化して記入できるようにした。

(図1、2参照)

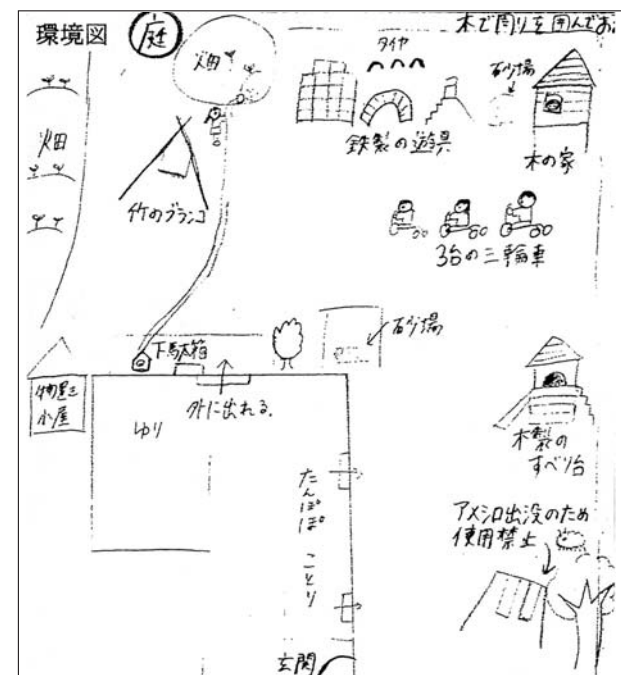


図1 園内環境図

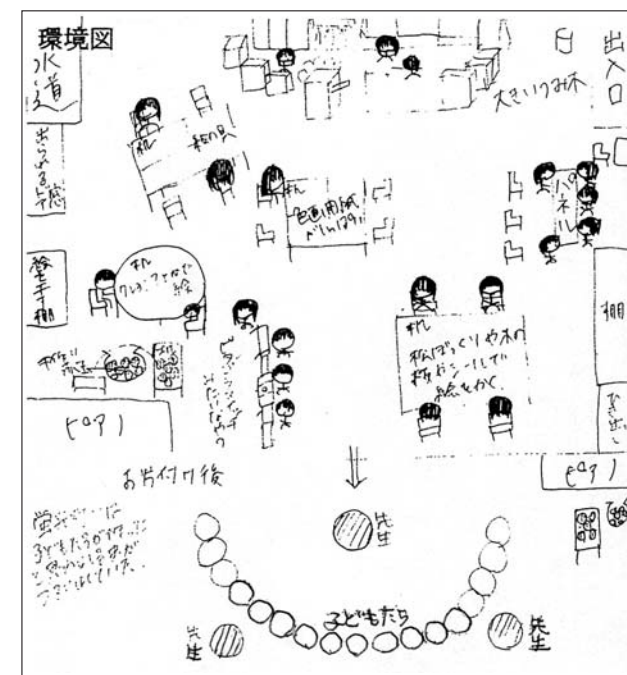


図2 園内環境図

(4) 保育所参観

昨年度は保育所参観前に事前レポートの指示は出さなかったが、幼稚園参観の課題の連続として、半数の学生が自分が参観する保育園のレポートを作成し、準備をして保育園を訪問していた。

2012年度は小学校・保育所も事前レポートを作成することを課した。参観5園のうち1園はホームページを持たないため、学生支援課にあるリーフレットをまとめる形でのレポート作成となった。参観時間帯が園外施設でのスイミングと重なり3~5歳児が不在のため、3歳未満児クラスの見学が中心となった園もあった。

3. 考察

1) アンケート結果

昨年度実施したアンケート結果と比較しつつ、以下に主な結果についてみていくことにする。

オムニバス形式の「地域社会と子ども」の授業は、本学で実施している授業評価の対象外の科目であるため、最終授業において独自のアンケート<sup>18</sup>を実施している。2012年度も、2011年度のアンケートとほぼ同形式で実施した。新たに追加した項目は2点ある。1点目は、質問項目2の「小学校・幼稚園・保育所参観の前に、訪問先についてレポートを作成しましたが、ア：どのようにして

作成しましたか?イ：レポートを作成したことで、訪問先に対する思いに変化がありましたか?(いずれも複数可)」である。昨年度は幼稚園についてのみ課題としたが、今年度は、小学校・保育所も事前レポートを課した点が異なる。もう1点は、訪問後に行うディスカッションを2回実施し、2回目はゼミ合同として8人程度のグループ(座席で指定した固定の10グループ)で行った点である。小学校・幼稚園・保育所それぞれに行ったので、全体として3回実施した。このグループについて変えた方がよいという声の一部学生から聞かれたため、質問項目3「ゼミ合同のディスカッショングループは固定でしたが、いかがでしたか?」を追加した。

この結果は図3に示すとおり、「毎回変えるのがよい」が36.6%で最も多かったものの、ほぼ3つに分かれた。「どちらともいえない」には、「同じメンバーの訪問先での思考の違いも聞きたいのもあるし、多くの人の視点や思考に触れたいというもある」とのコメントが書かれていた。気の合うメンバーのグループでは、固定グループを好むであろう。一通りの意見を出した後はなかなかディスカッションが深まらず、時間をもて余したグループもあった。5名の授業担当者は、合同でのディスカッション時に、適宜グループの進行状

況を見ながら助言を行った。欠席者が多かったり、観察が充分でなかったりした場合には、話し合いが深まりにくいグループがあった。それが変えたい理由にあることが考えられる。次年度実施に当たっての検討課題である。

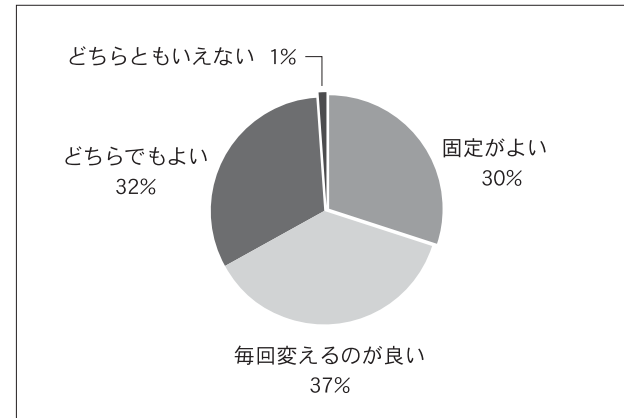


図3 ゼミ合同のディスカッショングループ

質問項目1では学外体験の印象を聞いた。結果は図4-aに示したとおりである。昨年度との比較ができるように、2011年度の結果を4-b(以下、bは2011年度の結果)として示す。

Enjoy!ミッションの場合は、役割によって大変さや子どものかかわりの度合い、かかわる対象年齢が異なるため単純比較はできないが、「とても印象に残っている」が減少したものの「どちらかと言えば印象に残っている」を合わせた数値は88.7%と昨年度を上回っている。ほかの参観先の印象についても「印象に残っている」合計はいずれも80%と以上となり、昨年以上の数値となった。特に直接子どもとかかわる機会がない小学校の場合、昨年度は「あまり印象に残っていない・少々期待外れだった」が20%あったが、今年度は18.3%と減少し、「印象に残っている」が多少増加している。大きな傾向としては2011年度と似通っている。すなわち、新しい体験ほど記憶が鮮明であるためか「とても印象に残っている」の

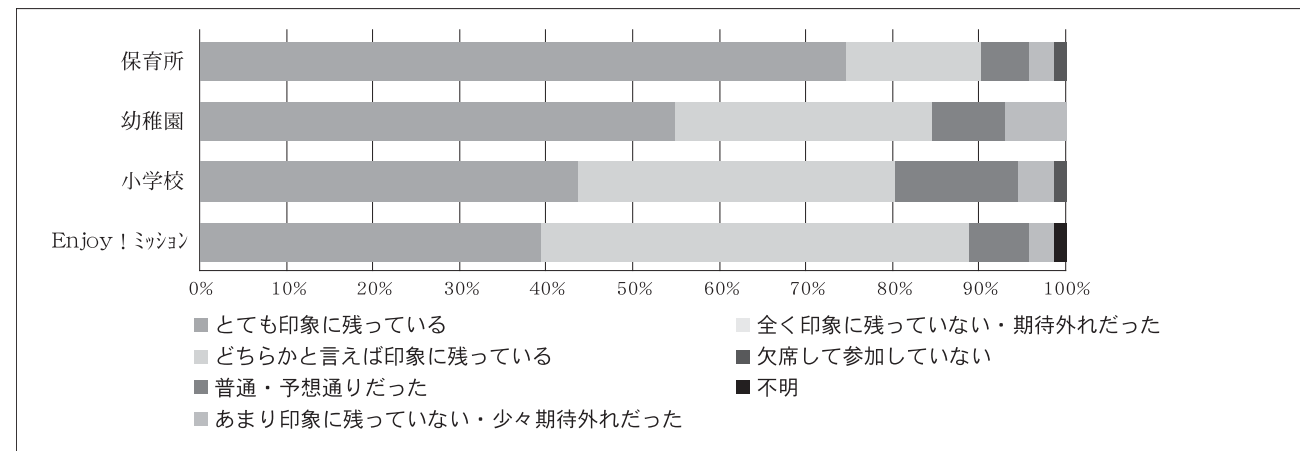


図4-a 学外体験の印象

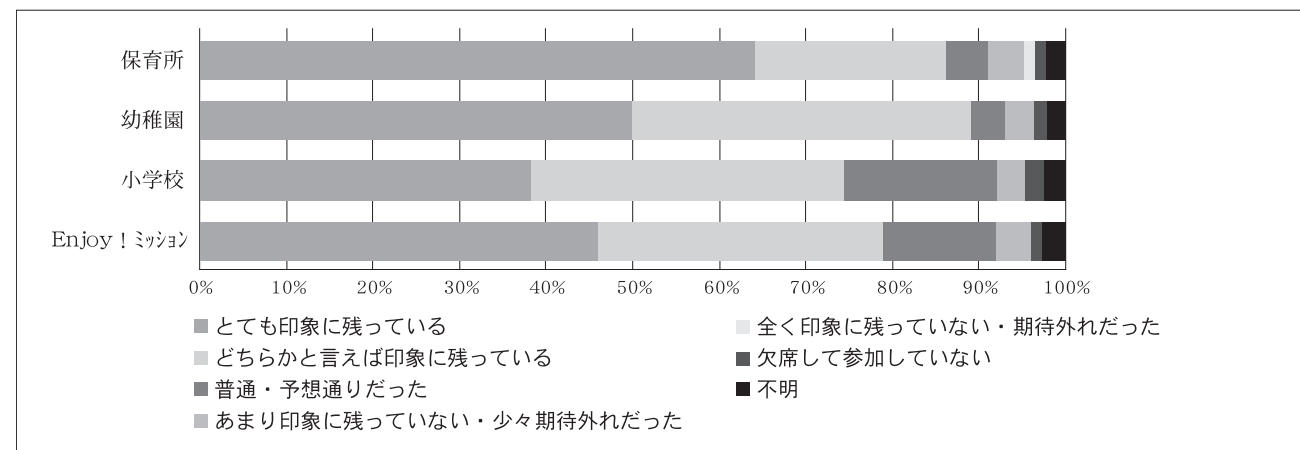


図4-b 学外体験の印象

保育所の割合が高くなる。

質問項目2は、事前レポートによる参観先への思いを尋ねた。5-a(1)~(3)(小学校~保育所)参照。

今回小学校から保育所まで訪問先すべてに事前レポートを課したのは、昨年度のアンケート結果(図5-b)で、49.5%の学生が「参観したい気持ちが高まった」と回答していたことによる。この事前レポートで参観先の概要を調べることで、参観時のねらいを立てやすくなるという効果もあった。たとえば、幼稚園・保育所に比べると小学校ホームページは文字情報が多い。校風や教育目標・今年度の重点事項を知ることで、それらが日常の教育活動でどのように読み取れるかをねらいとした学生もいた。

この授業全体を振り返った最終レポート<sup>19</sup>に、事前訪問レポートの意義に触れた学生がいる。「参観前に事前学習としてその園についてのレポートを出した。事前調べはその場所への礼儀であると発表で聞いた。なにも調べないで行くと、どこになんの保育室や教室があるか分からない。その場に行きいちいち聞くのも忙しいのに迷惑である。こちらから調べておくと無駄な質問は避けることができる。なおかつ調べないより、自分の気持ちに余裕ができ、集中して参観できる。」何人の学生がこのような気づきに達したのかは把握していない。けれども、事前レポート作成により関心を持って参観に臨むことができるという点が、アンケートからも明らかになった。今後も事前レポートを課していくべきであろう。

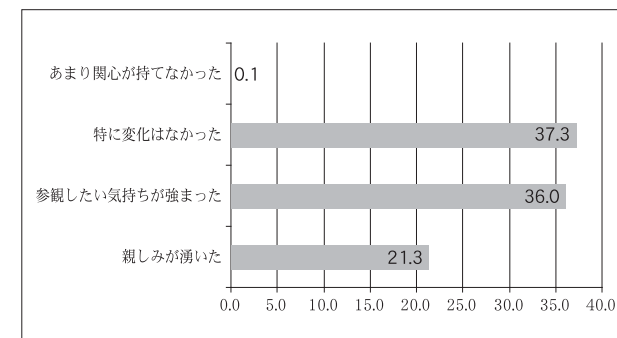


図5-a(1) 小学校レポート作成と訪問先への思い

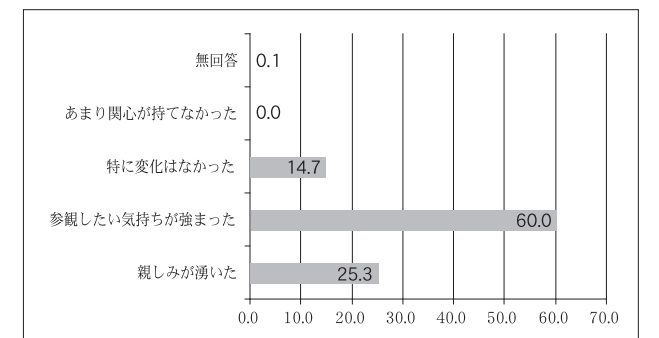


図5-a(3) 保育所レポート作成と訪問先への思い

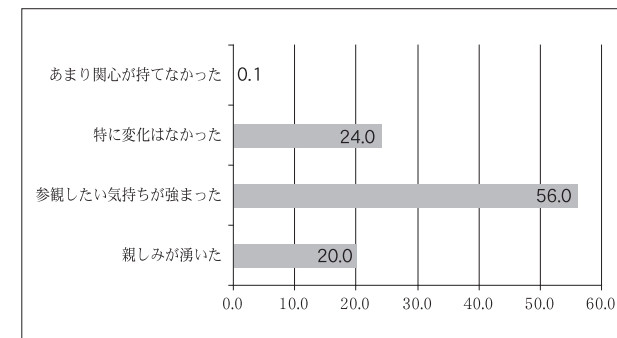


図5-a(2) 幼稚園レポート作成と訪問先への思い

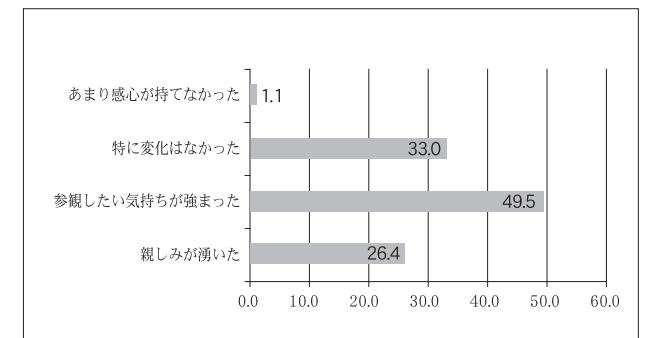


図5-b 幼稚園レポート作成と訪問先幼稚園への思い



体験型授業が学生に与えた影響については、まずアンケート項目4「参観を体験して、今一番関心がある子どもの年齢は、次のどれですか」の数値が参考になるであろう(図6)。複数回答可であるが、直接かかわる経験をした3～5歳児が最も多く、半数以上が関心を持っている。このことは、8月～9月に幼稚園で行うプレ実習へのつながりを考えると、好ましい結果と言える。

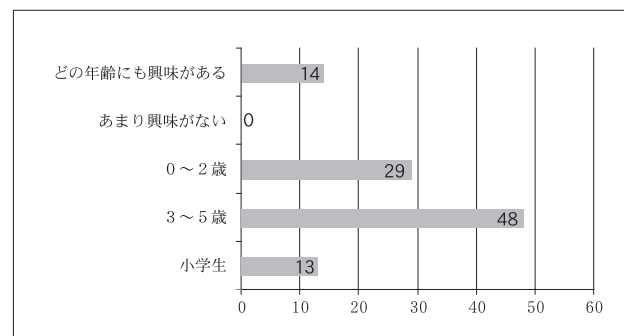


図6 参観体験後、一番関心がある年齢

アンケート項目5「ゼミグループ以外の体験内容について話を聞くとしたら、次のどの内容を聞きたいと思いますか? (もっと話し合いの時間がほしかったのはどれですか?)」の回答は、図7のとおりである。これは、図4-aの印象に残った学外体験で保育所が多かったこととの関連があるかもしれない。

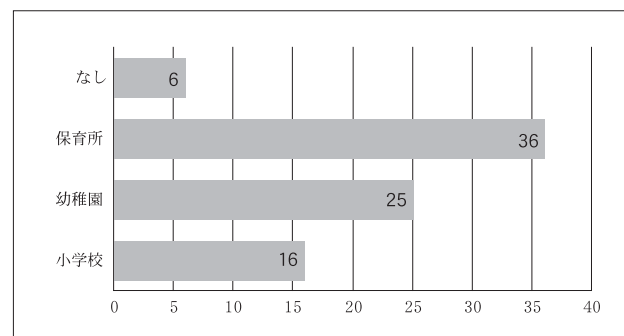


図7 もっと聞きたい体験

質問項目6は、「講義と体験によりこれまで持っていたイメージや(子ども・施設)理解に変化がありましたか?」であり、体験型の本授業が学生に影響を与えたのかどうかを問うものである。

2011年度は85%の学生が「変化があった」と回答した。シラバスを修正した2012年度は、ほぼ全員といってよい97.2%が「変化があった」と回答した。不明の1%を除くと「変化がなかった」と回答したのはわずか1名である。変化をもたらした要因が何であるかは調査していないが、講義や体験以外に参観後2回のディスカッション(2011年度は1回のみ)をした効果を挙げることができる。1か所の参観では分からなかった環境や教師の接し方などについて、異なる施設を見た学生の意見や感想を聞くことで、狭い見方や理解から抜け出すことが可能となる。

例えば、最終レポートに、2か月前の自分の行動を振り返って疑問を持ったことを記した学生がいる。「保育園や幼稚園などの環境において工夫していることは、このように活用してほしい、興味を持ってほしいという保育者の意図があるということをととも考えさせられた。参観に行ったときは、そのようなことには目も付けておらず普通に見逃していた自分がある。～自分のまとめに加えることは、Enjoy!ミッションでの私の振る舞いについての疑問である。～(結局私がこまを回すところまでやってしまった。)しかし、その行動は男の子のためになったのだろうか。いまだにその時にどうすることが良かったのか疑問である。」この学生は2か月前のEnjoy!ミッションのレポートにも、3～5歳ぐらいの子どもに適した援助はどうあるべきかについて述べていた。その点でいえば、参観での学びがバラバラのものでなく、最終レポート作成やレポート発表を通して総合化されている。

質問項目7は、質問項目6で「変化があった」と回答した人に対し、「どのような点で変化があったのか」を尋ねたものである。2011年度で最も多かったのが、「どの職種にするか迷ってきた」45.1%であったが、2012年度は26.8%に低下した。2012年度で最も多かったのは、「今まで以上に保育士になりたい気持ちが強くなった」で36.36%(42.7%)、「今まで以上に幼稚園教諭になりたい気持ちが強くなった」が38.0%(29.3%)、「保育士資格に興味を湧いた」36.6%(42.7%)、「幼稚園教諭の資格に興味を湧いた」35.2%(37.8%)、「小学校教諭の資格に興味を湧いた」25.4%

(24.4%)となっている(図8参照)。

質問項目8「学外体験により子どもの見方に変化がありましたか?」については、80.3%(2011年度70.5%)の学生が「いっそう子どもに関する仕事に興味を湧いた」と応えており、子どもにかかわる専門職を具体的に考えることにつながっていると判断できるであろう。次に多かったのは、

「自分に適性があるか不安が生じた」の49.3%(61.4%)である。「実習への不安が出てきた」も47.9%と半数近くの学生が答えているが、一方で「もっといろいろな施設での体験をしたくなった」「関心ある対象が広がった」も47.3%と同数が答えるなど、前向きにとらえている学生も多い(図9参照)。

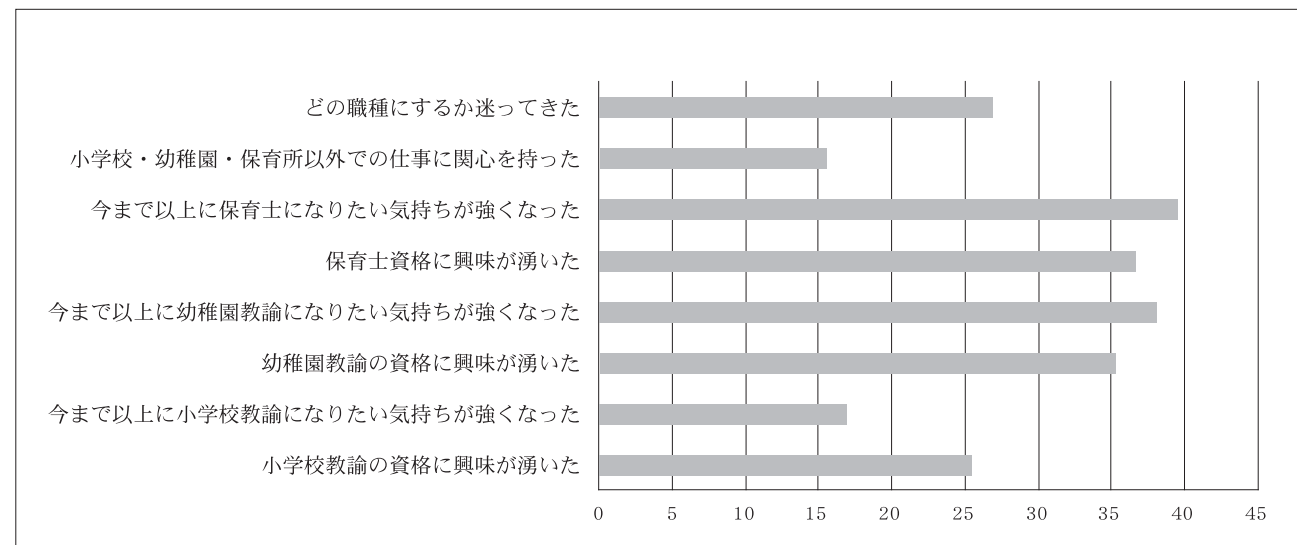


図8 講義と体験により、これまでのイメージや理解にどのような変化があったか

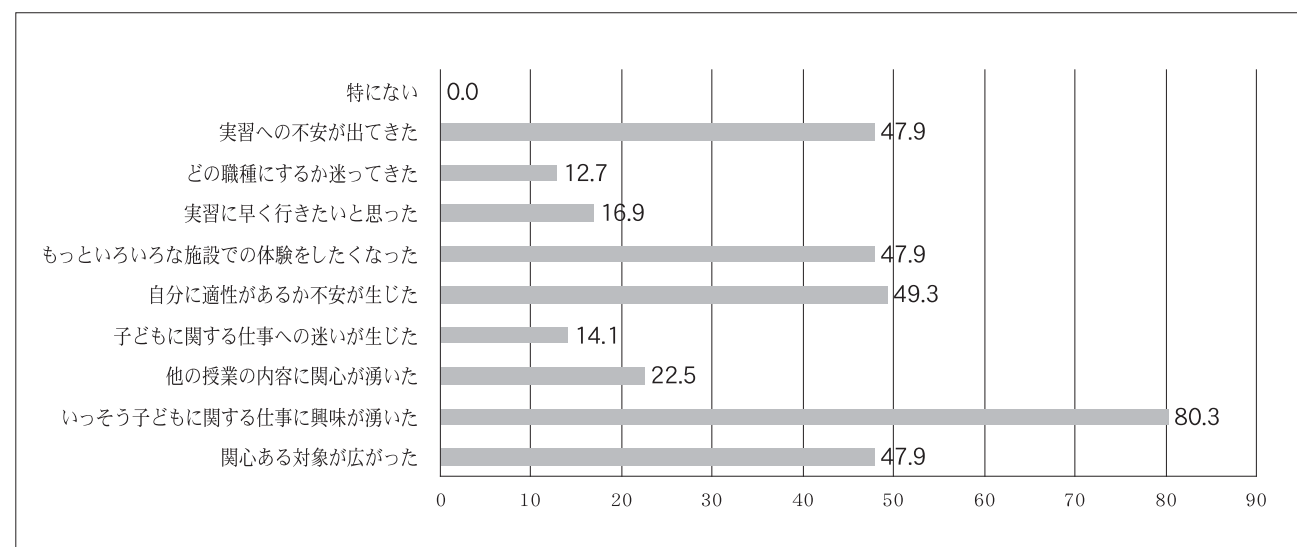


図9 学外体験により子どもの見方に変化があったか

最終レポートに、「私はこの『地域社会と子ども』の授業を通して、先生、保育者とは何なのかをしっかりと考えることができたと思う。実際に教育の現場を見ることで、私が目指している保育者像が少しだけ見えてきた気がした。」と記した学生がいる。また、別の学生は、「これまでに参観してきた小学校・幼稚園・保育園での経験を通して、子どもとのかかわり方、子どもの周りの環境、先生方の動きを主に参観の視点としてきた。中学校の時の幼稚園実習体験では、ただ子どもと遊ぶことだけを考えていた。けれども、大学に入って、保育についての専門的な授業（保育原理・保育内容・言葉）を受け、その中でいろんな体験を通しての話を聞いたり、実際に体験することで、子どもとかわるとき視点が変わった。その視点が変わったことで、気づきが増えた。そこから疑問に変わり追究、調べることができるようになった。また、『地域社会と子ども』の授業では、他の参観者との話し合いがあり、様々な施設の違いに気づくことができた」と述べ、授業を通して見方が変わったとことを挙げている。

質問項目9「2年次からのコース選択の参考になったか」については、70.4%（2011年度57.0%）の学生が「参考になった」と回答し、「どちらかといえば参考になった」26.8%（31.2%）を合わせると、97.2%（88.2%）の学生にとってコース選択の参考となっている（図10参照）。

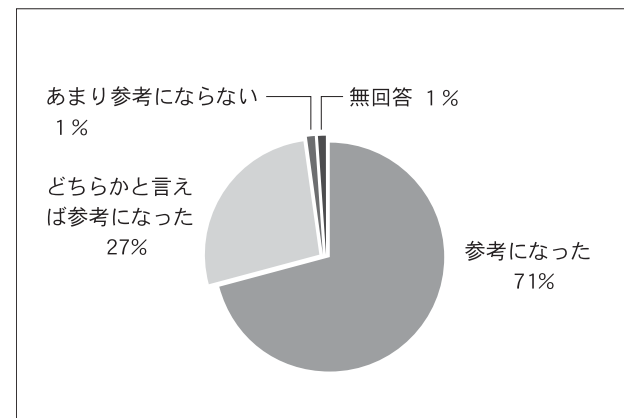


図10-a コース選択の参考になったか

2) 最終レポート発表とまとめレポートより  
本授業では、ゼミグループでの振り返りを基本として参観後のディスカッションを行い、合同のディスカッションで他の参観先の様子や考え方を知ることができる。さらに、最終レポート発表で授業全体を通して学んだことの発表を聞く。最終レポートは「『地域社会と子ども』の授業全体を振り返って、学んだこと・考えたことをまとめる」「内容は次の①～⑤を参考にしてまとめる」という指示でレポートを作成する。発表は、最終レポートに記載したことをそのままクラス全体の前で読み上げる形式であるが、参観や体験を通して気づいたことだけでなく、そこから自分はどう考えたのかという点までが含まれた内容である。学生たちはこれらをどのようにとらえたのか、レポートから探してみたい。

・この授業を終えて見つけた課題は、様々な視点から物事をとらえることのできる目を養うことである。自分の考え一つに縛られず、出来るだけ多くの意見を聴き、そこから自分に足りないものを吸収し、一つのことを様々な視点から見ることができるようになることが必要である。～Nさんの考えは、私にない視点から述べられており、私に自分の意見を考え直す機会を与え、視野を広げてくれた。このように、この授業では、保育・教育現場の参観だけでなく、討論や発表といった他の学生の様々な意見・考えに触

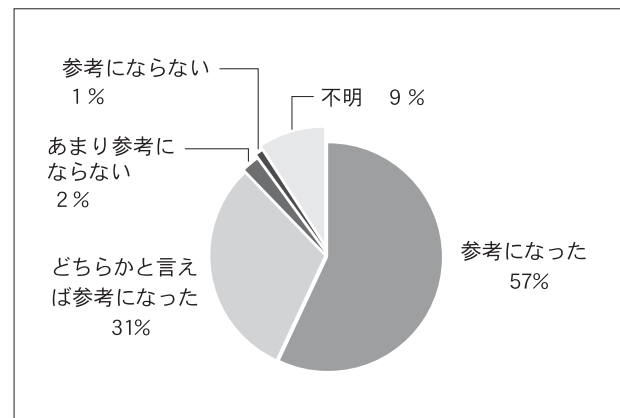


図10-b コース選択の参考になったか

れることのできる活動を通じて、多様な意見に触れ、自分の意見と比較し、思考を深めることができた。

- ・私は、先生がすることに、今までなぜこんなことをするのだろうと疑問を持って接したことはあったけれど、意図までは考えたことはなかった。少し自分の視点を変えてみると、見えてくるものもたくさんあるのだと分かった。
- ・人によって感じていることはやはり違う。思考回路は個人個人でばらつきがあり、同じように考える・感じるの難しい。感じていることが違うということは、目の付けどころにも変化が出てくると思った。～人の発表を聞くことで、自分のものにはできるのは大きいと感じた。こういう発表の機会が増えると、代表者の意見を参考にしたり、知識としても増やすことができる。
- ・今回学んだことは、いろいろな人のレポートを見たり、話を聞いたりすることで自分の考えの浅さなどに気づくことができるし、次回からのレポートの改善にもつながるとのことだ。自分の考えだけでは、見えるものも限られてくるし、自分に何が足りないかが分からない。今回周りの友達の話を知ることができて本当に良かった。また、先生たちの話を聞いて、授業との関連づけや自分が参観した幼稚園や保育園、小学校に縛られずに、ほかにもボランティアなどいろいろなところに行ったほうが良いということが分かった。
- ・各ゼミから選ばれた7名のレポート発表を聞き、また新たな視点から見た子どもの姿を知ることができた。～私ももう少し視野を広げて、子どもばかりを見るのではなく、子どもが何かかかわっているのかを見ていく必要があると感じた。～みんなと被るところもあるが、他の意見を聞くことでまた違う保育者像ができた。自分が思っているだけの保育者像ではなく、みんなが感じている保育者像を聞くことで、よりよい保育者になることができるのではないと思う。～そう気づけたのは今日7名の発表を聞いてそれぞれの学びを共有することができたからだ。みんなの学びを共有したことで、私の学びも深いものとなり、時間は短かったがとても内容の濃い時間が過ごせた。

- ・学校の設備が子ども達にも影響を及ぼしているのだと、発表者の言葉を聞いて気づくことができた。確かに、他のゼミの子の話を知ると、その学校や園で違いは多く見られたし、目標としていることも全く違った。その学校や園の良さというものにもっと重点を置いて参観できればよかった。設備が子どもの成長につながり、子どもの感性や創造力を広げるということにとっても納得できた。

以上、いくつかの文章に書かれたように、「多様な視点を持つ、異なる視点から捉えてみる、他の学生の発表や意見を吸収し、学びを共有する」という点が多くレポートに見られた。「視点をもつことで見えてくるものが違う」という点については前稿<sup>20</sup>においても既に触れているが、異なるグループとのディスカッションや最終レポートにおける発表内容などにより、今回は多くの学生が視点の大切さや今後行うプレ実習や実習に臨む姿勢についても言及していた。

昨年度の参観後の感想や事後レポートでは、直接子どもとのふれあいができず観察に徹することになったグループでは、子どもと遊べなかったことを不満に思う学生が幼稚園・保育所ともに多かった。今年度は事前レポートの作成や事前指導において何を見るのか視点をしっかり持つ指導を行ったことで、昨年度より不満の声が少なくなった。例えば、幼稚園で参観に徹したゼミグループの参観後の印象では、15名中3名が「とても印象に残っている」と答え、「どちらかと言えば印象に残っている」が7名であり、80%の学生が「印象に残っている」と回答している。「普通・予想通り」が2名、「あまり印象に残っていない・期待外れ」と答えたのは1名に過ぎなかった。昨年度本授業を担当した教員間での話し合いでも、直接子どもとのふれあいが無いから不満が出て仕方がない、可能な限り参加型参観を目指したいとの課題を述べた。しかし、移動時間と協力体制等の制約上、今後も今回の受け入れ先で参観を行うことになる。今回のアンケート結果を見ると、必ずしも「参観=子どもとのふれあい」ではないこと、参観に徹する場合の視点をどう持つか、何をねらいとするかを事前指導において行うことで、不満を少なくすることが可能であることを示唆している。



#### 4. 終わりに

大学における職業的自立に関しては、中央教育審議会の議論の中で、「教育課程の編成と実施に当たっては、大学として保証すべき教育の内容・水準に十分留意する必要がある。例えば、幅広い職業意識の形成に着目した授業科目を開設する場合に、大学の判断により、それが教育課程の一部として位置づけられるのにふさわしい内容・水準であることを明らかにするとともに、専門養育等とのバランスにも留意しつつ、過度に傾斜しないような配慮が考えられる。」<sup>21</sup>と述べられている。「地域社会と子ども」の授業は、本学科の専門的学びを方向付ける導入科目であるとともに、アンケート結果にも示される通り、職業意識を早い段階から形成する正課科目としても位置付けることができる。

2012(平成24)年3月26日に「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育む大学へ」と題する中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ(案)が出された。その中で、学修時間の確保やアクティブラーニングの導入が指摘されている。また、教室外体験プログラム・ディスカッションなどの能動的学修法の活用など学生の主体的な学びにつながる要素も求められている。「地域社会と子ども」はまだ2年目の授業であるが、基礎ゼミ担当教員と授業担当者と同じにすることや、ゼミメンバーでの学外体験を行うことにより、初年次教育に求められるレポート作成やディスカッションなどの学びの技法を具体的場面を活用して体得しやすく、教員にとっても指導しやすい科目配置となっている。また、中央教育審議会より出された「学士課程教育における方針の明確化」において、「学生の視点に立った学習の系統性や順次性」<sup>22</sup>も挙げられている。

「学士課程教育の質的転換への取り組み」にあるいくつかの項目のうち、本授業で扱えるのはほんの一部に過ぎない。しかし、専門職人材を養成する本学科の入門科目としては、一定の成果を挙げていると考えられる。前稿では、「本授業が『質の高い体験活動』となるためには、体験を「体験した」だけで終わらせないこと、各体験前の講義と体験後の振り返り(ディスカッション、レポート、課題の設定)を行うこと、コーディネー

ターの働き(学内、学外施設との連絡調整)があること、学生が学びの方向性を得られるように的確なアドバイスをを行うこと等が必要<sup>23</sup>」と述べた。

今後も担当者間の打ち合わせを密に行い、事前学習、参観時の視点の示唆、事後レポート及び振り返りのディスカッション、最終レポート及びレポート発表、最終の追加レポートという流れを保持しつつ、内容を検討していくことで、さらにこの授業の役割を高めていくことが可能であると考えられる。

最後に、2012年度の授業担当者は筆者以外に大井佳子・金丸洋子・金森俊郎・辻直人が担当した。授業代表者である筆者がアンケート集計と考察を行ったため単著としているが、学生への助言を含め成果は全教員によるものであり、不備に関しては筆者に帰するものであることを付言する。

#### 【付記】

謝辞：本授業を行うに際し、参観先として下記の施設にご理解・ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

- 小学校：扇台小学校、十一屋小学校、中央小学校、長坂台小学校、南小立野小学校  
 幼稚園：愛香南部幼稚園、川上幼稚園、桜木幼稚園、北陸学院第一幼稚園、若草幼稚園  
 保育所：泉の台幼稚園、のぞみ保育園、梅光保育園、平和保育園、わかば保育園、(五十音順に記載)

#### 〈注〉

- 1 詳細は、山森泉・大井佳子・金森俊郎・中島賢介・吉田若葉による「体験型授業の課題と展望―「地域社会と子ども」の実践より―」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』4号 2012年3月)を参照されたい。
- 2 大学設置基準第2条の2：大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、公表するものとする。
- 3 第1章 総則(目的) 第1条
- 4 第2章 学部、学科、学生定員(学部、学科、定員) 第5条2
- 5 同上 第5条4
- 6 注1に同じ
- 7 入学時の子ども体験の有無と、2年次での進路希望に関連した資格取得希望が一致しているかどうかの

詳細な調査は実施していない。

- 8 総合教養：社会で起っていることの「本質」を見極めるための知識を身につけ、知性を深めるための科目。学生は、自分の所属する学科以外の講義を受けることで、これまで自分が知らなかった事柄だけでなく、新たな視点や考え方に気づくことができる。キャリア科目：就職や職業生活についてだけでなく、社会に必要な知識やツールを理解し、実践力を身に付ける。基礎力強化科目：入学後、基礎学力の補強が必要と認められた学生を対象に、日本語・英語・数学の基礎力充実を義務化。(「2013大学案内」掲載内容)
- 9 現段階では科目履修の影響について調べることはしていないが、実際のどの程度コース選択の参考になったかは、今後調査することを検討したい。
- 10 2011年度は基礎ゼミの時間を積極的に活用するに至っていなかったため、振り返りの時間を十分とれず、参観後の学びについては不十分な面があった。
- 11 汐見稔幸編 岩波ジュニア新書 2011年。助産師、小児科医、保育士、小学校教諭、中学校教諭、学童クラブ指導員、家庭裁判所調査官、養護教諭、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、フリースクール主宰、弁護士の13人が自らの仕事を語る内容である。
- 12 Enjoy! ミッション・小学校参観は昨年までの書式で行ったが、幼稚園参観、保育所参観時は実習日誌形式に近づけ、環境構成の図も記録できるようにした。
- 13 幼稚園児と小学校低学年は親子で参加し、幼稚園や小学校独自のプログラムの後イベントを自由に巡る。中高生は、大学の模擬授業体験の後自由行動となる。
- 14 絵本館I号は2年生が担当した。
- 15 本学地域貢献教育開発センターで行う講座の一つ。2012年度から「ものづくり講座」として新たに学外の講師に依頼して、染色、腹話術、昔遊び、ステンドグラス、教材づくりなどの講座が用意された。本学科1年生は、実習指導担当者の意向により全員が希望する講座を受講することになった。
- 16 注1 85頁参照
- 17 本学独自の实習前の現場体験学習システムである。詳細は本学紀要5号 金丸洋子著「北陸学院大学幼児児童教育学科小学校教員養成課程に関する一考察―2011年度卒業生からのフィードバックによる―」を参照されたい。
- 18 いわゆる授業評価アンケートに代わるものとして、学生がどう受け止めたかについて2011年度から実施している。統計的処理を行う形式ではないため、単純集計値(%)による結果提示である。
- 19 「地域社会と子ども」の授業では、参観前に訪問先に

ついて調べる事前レポート(書式任意。小学校・幼稚園・保育所)3回、参観後にまとめる指定書式のレポート(同上)3回、ディスカッションの都度新たな気づきを追加して記入する。3回の学外参観のディスカッション終了後に最終レポート(A4版2枚程度)にまとめる。ゼミ担当教員が最終レポートを読んで代表学生を各ゼミ1名程度選び、全体の前で発表する。それを聞いて考えたことや参考になったことをA4版1枚に最終レポート3枚目としてまとめるという流れになっている。

20 注1 86頁参照

21 2009(平成21)年12月15日 中央教育審議会 大学分科会 質保障システム部会「大学における社会的・職業的自立に関する指導等(キャリアガイダンス)の実施について(審議会経過概要)より 3.上記の現状と理念を踏まえた大学設置基準の改正(2)留意事項 2.教育課程の編成における取扱い」の項参照

22 2008(平成20)年12月24日に中央教育審議会より「学士課程教育の構築に向けて」(答申)が出された。その第2章「学士課程教育における方針の明確化」では、「学生の視点に立った学習の系統性や順次性」がこれまでの教育課程においては配慮が十分されてこなかったことに言及している。

23 注1 91頁参照